SS 研 2006/1/15

Hart, J., Shaver, P. R., & Goldenberg, J. L.(2005)

Attachment, Self-esteem, Worldviews, and Terror Management:

Evidence for a Tripartite Security System

Journal of Personality and social psychology, 88, 999-1013

Rep. 脇本 竜太郎[1]

◇近年，愛着理論と存在脅威管理理論(TMT)の橋渡しをする研究が行われている(詳細なレビューは Mikulincer et al.,2003 参照)

→多くの人間行動が心的安全(sense of psychological security)の確保，意識的・非意識的な念慮・不安の低減を志向していることを示唆

→親密な関係，自尊心，文化的信念体系(cultural belief systems)は相互に関係しながら，心的安全の確保・不安の低減に向け機能し，また，３者は代替可能な関係にあるという視点を呈示⇒三元防衛システム(tripartite security system)

→このモデルを統合の枠組みとして考えることで･･･

・愛着，自尊心，文化的世界観それぞれに関する理論を統合することが可能になる．

・防衛システムの 1 要素に対する脅威が，特に安全が脅かされやすい個人で，他の要素での補償的反応を引き起こすという仮説を実証的に検討することが可能になる．

⇒本論文では，三元防衛システムから導かれる示唆を検証した 4 つの研究を報告する．

Theoretical Overview

愛着理論と TMT の･･･

・共通点：人は脆弱で防衛，支援，楽観主義を支えるような励ましを必要とするという人間観

・相違点：脆弱性の捉え方，異なる不安低減のメカニズムへの注目

Attachment Theory

◇Bowlby(1969/1982，1973，1980)

・人は，特にストレス状況や苦境に置かれた際に，愛着対象に対する実際のまたは想像上の近接性を求める．

・愛着行動システムは進化の観点から適応的である．

a)特に幼い人間は，防衛者としての能力が既に示されている，より成熟した親しい個体(愛着対象)と一緒にいるほうが危険から守られる．

b)愛着対象と一緒にいることによって生まれる安心(felt security)が，自律的行動を可能にし，成長や適応，繁殖の成功を促進するような重要な目的の追求を可能にする．

・愛着行動は幼児期によく見られるが，人の生涯を通じて効果を発揮し，また機能的に重要．

➢Hazan & Shaver(1987)

・幼児期の愛着行動と青年・成人期の恋人に対する愛着とが酷似していることを報告

[1] 東京大学大学院教育学研究科 e-mail:wyvern@p.u-tokyo.ac.jp

➢成人期の愛着理論(Adult Attachment Theory; Fraley & Shaver,2000； Mikulincer & Shaver, 2003[2])

・長期的な恋愛関係への動機，恋愛関係における行動，およびその行動の個人差は近接性，保護，情緒的支援への内的欲求によって説明可能である．

・幼児期と同様に外的内的脅威が成人の愛着システムを起動させ，意識的，非意識的近接性の探求を生ぜしめる．

・成人でも実際もしくは想像上の近接性と支援の獲得は，felt security を回復させる

TMT

◇人は，象徴的な心的現実を作り上げることに動機付けられている．その中では個人は不死かつ価値ある存在であると信じることができ，そのため人間固有の死への気づきによる不可避な恐怖と混乱を低減することができる．

◇自尊心は最初は養育者との相互作用の中で生じ，その後は文化的世界観の行動の基準に従い生きることで維持される．

◇文化によって定義される世界観は象徴的・直接的不死概念を与える，第一の死に対する防衛メカニズムである．･･･自尊心は個人がどれだけ不死概念を享受するに値する存在かを示す

◇TMT と愛着理論双方が幼少期の経験とその後の自尊心が関連することを想定

親密な関係の相手から愛され，価値を認められることは，自尊心と文化的世界観同様，心的安全の源となるもの･･･愛着関係は第 3 の不安緩衝装置←Mikulincer らの一連の研究が支持

Empirical Review

◇愛着，自尊心，文化的価値観のシステムのそれぞれが脅威に反応して活性化し，不安を低減し安心を高めるということについては，既に多くの証拠が提出されている．本節ではそれらを簡潔にレビューする．

Evidence for the Defensive Function of the Attachment Motive

◇Ainsworth et al.(1978); Bowlby(1969/1982，1973)

子どもは，脅威(ひとりきりになること，苦痛を経験すること，見知らぬ他者の存在)に遭遇すると，泣き叫んだり，愛着対象を探したり，利用可能な愛着対象にすがりつくという反応を見せる．そして，愛着対象からの慰めは，一般的に不安を低減し，子どもが探索や（他者との）交流に戻ることを可能にする．

◇Mikulincer et al.(2000), Mikulincer et al.,(2002)

成人は死，病，失敗，別離等の脅威に遭遇すると愛着システムを活性化させる．

◇Florian et al.(2002)

死について考えると，人は関係の構築および既存の関係の親密化を行おうとする．

[2] これらは更新版.

◇愛着対象からの愛と支えに対する信頼(特性的・状況的)は・・・

・防衛性の低さ(Mikulincer & Shaver, 2001)，認知的な開放性(openness; Mikulincer, 1997)，他者に対する共感性の高さ(Gilath et al.,2005)と関連

Evidence for the Defensive Function of the Self-Esteem Motive

◇自己肯定理論(Steele, 1988)に基づく研究

・人は失敗に対し，即座に自己の重要な側面を肯定するという反応を示す(Tesser et al.,1996)

・自己肯定を行うと，人は失敗後に重要な目標に対する考え込みをする傾向が少なくなり(Koole et al.,1999)，脅威情報や信念と異なる情報に対して非防衛的になる(Cohen et al.,2002).

◇TMT に基づく研究

・人は死について考えると･･･

➢自尊心を獲得しようという意図を高める(Ben Ari et al.,1999 等)

➢自尊心の基盤となっている自己の側面により注目するようになる(Goldenberg et al.,2000)

➢成功と失敗の帰属を自己奉仕的な方向に変える(Milulincer & Florian,2002)

・自尊心が特性的に高い者，また状態的に高められた者は肉体に対する脅威や死に関連する刺激にさらされた後の不安が低い(Greenberg et al.,1992)

Evidence for the Defensive Function of the Worldview Motive

◇人は一貫した世界観の維持に動機付けられている

・認知的不協和

・公正な世界(just-world)の信念(Lerner, 1980)

：この世界は人が受け取るに値するものを受け取る本質的に公正な世界であるという信念

→人は不幸に遭遇した犠牲者について慮らず，社会規範から逸脱した人間を処罰しようとする

◇TMT に基づく研究

・人は死について考えると

➢内集団成員をより肯定的に，外集団成員をより否定的に評価するようになる(Greenberg et al.,1990)

➢社会的逸脱者に与えられるべき罰金の額を多く評定する(Rosenblatt et al.,1989)

➢1 つの方法で文化的世界観の防衛を行った後には，他の文化的世界観の防衛は生じない(McGregor et al.,1998)

The Security Motive: An Integration

◇以上の研究知見は，

・人は心的安全の感覚の維持に動機付けられている

・愛着，自尊心，文化的世界観は安全という目標状態に至る主要な通路である

・安心が達成されている限りにおいて人はより非防衛的であり，成長に関連した思考や行動に対するより強い志向性を示す

というモデルの土台を提供する

◇この安全の維持のプロセスは，幼児の行動の根底にあるプロセスに倣って概念化することができる．

・死や怪我への脆弱性の信号となるような刺激(暗闇，未知性，痛み)にさらされると，愛着対象からの支援と慰めを即座に求める
・養育者は不快感と脆弱性から自己を守ってくれる最も重要な聖域
・自分で動き回れるようになると，子どもの行動は養育者の賞賛と非難にさらされることになり，そのことにより，子どもの信念と行動が文化的世界観に示された方向に形成される．
・子どもは賞賛を愛と安心，肯定的な自己観と結びつけ，非難を愛されなくなること，脆弱性，否定的な自己観と結びつける
→ゆえに，少なくとも幼少期には，自尊心は愛着経験(養育者からの愛と支援)に基づいている
・子どもがより広い社会に組み入れられていくにしたがって，文化的規範・信念が自尊心の基盤となる．そして，文化的世界観は生の有限性に対する気づきに関連する不安，安心と自尊心の源（いわば養育者の代理）となる．

◇愛着，世界観，自尊心は弁証法的関係にある：不安の制御に関しては，機能的に分離不可能

・自己価値の感覚は愛着対象から愛と保護を得ているという感覚に深く根ざしている
・世界が秩序だっており予測可能であるという信念は，愛着による安心と心理的に同じ
・自己価値の感覚は愛着対象の相互作用と文化的価値観に従い生きることにより得られる
・文化的世界観は愛着対象，権威，仲間それぞれが持つ価値観の合成物と考えられる．

◇この綾を成す関係を考えれば，3者が相互依存関係にある安心確保のメカニズムが考えられる．

・3 つの要素それぞれを充足・強化する行動を動機付けることにより，不安が力動的に制御される．
・1 つの要素への脅威が，その要素の防衛だけでなく，他の 2 つの要素での防衛反応を動機付ける．

＜モデルを支持する既存の知見＞

➢愛着研究

・愛着関係への脅威を考えると，死の思考の接近可能性が高まる(Florian et al.,2002)
・愛着での安心を高めると，外集団批判が弱まる(Mikulincer & Shaver, 2001)

➢自尊心研究

・失敗(failure)プライムにより，愛着システムが活性化する(Mikulincer et al.,2000)
・実際に失敗を経験すると外集団批判が強まり，それにより自尊心が回復する(Fein & Spencer, 1997)
・自尊心を高めると，死について考えた後の文化的価値観の防衛が弱まる(Harmon-Jones et al.,1997)

➢世界観研究

・自己の世界観の重要な側面が肯定された後には，自己の信念への脅威や困難に対する防衛的否認が弱まる(Sherman & Cohen, 2002)

◇検討されていないことは…
・愛着への脅威が文化的世界観の防衛や自尊心追求を動機付けるのか？
・文化的世界観への脅威が愛着システムを起動させるのか？
←本論文の研究では，以上のことを検討すると同時に，これらと関連する個人差を検討する．

Attachment Style

◇愛着システムの作働に関連する実験結果は，しばしば特性的あるいは状態的な愛着スタイルの差異に調節される．また，MS 処理の効果も調節することが示されている(Mikulincer & Florian, 2000).

◇MS 処理の効果は自尊心や神経質傾向によっても調節(Goldenberg et al.,1999; Harmon-Jones et al.,1997)されるが，今回は愛着スタイルに着目する．その理由は
・愛着スタイルの個人差の萌芽は自尊心や他の存在脅威メカニズムよりも発達的に先に顕れるようであるため．
・愛着スタイルの個人差の次元である不安(anxiety)と回避(avoidance)は，Becker(1973)[3]が死の脅威に対して形成されると論じた 2 つの実存的動機(twin ontological motive)とよく似ていると思われるため
➢Becker(1973)の実存的動機
同化（merge）：自己より力の強いもの(養育者，社会集団，信念体系)との一体化すること
異化(emerge)：上記のような保護を与えるものから離脱し，独立し独自の活動を行うこと
→愛着不安は愛着システムの過剰な活性化と他者への過度の依存(同化)，愛着回避は愛着システムの活性不全と自立性の過度の強調(異化)を反映すると考えられる．
➢Mikulincer & Florian(2000)
・不安定な愛着(attachment insecurity)は MS 処理に対する攻撃的な世界観防衛反応，安定愛着はより成熟した，成長志向的な反応と関連．
→安全システムへの脅威に対してどう反応するかは，愛着スタイルの関数であり，利用可能な防衛の機会によって異なると考えられる
不安型･･･同化方略(愛着対象との近接性探求，価値観の防衛)
回避型･･･異化方略(自尊心防衛と攻撃性)

◇不安と回避は統計的に独立であるので，4 つの愛着スタイルが考えられる
・安定(secure；低不安低回避)，恐れ(fearful；高不安高回避)，撤退(dismissing；低不安高回避)，没頭(preoccupied；高不安低回避)
・4 つの分類は決して愛着スタイルが本当に 4 つに類型化できることを示唆するものではない．ただ，特に不安と回避が相互作用する場合に実験結果の記述に有効であるので，今回はこの分類を用いている．

◇本研究の予測

[3] TMT の研究者をインスパイヤした文化人類学者．TMT の基本はこの人の論考に拠っています．

・不安型の愛着を持つ個人は，愛着への脅威に対して，世界観の防衛をより強く示すであろう．(Study1)
・回避傾向の強い個人は，愛着への脅威に対して，自己をより肯定的に描写する反応をしめすであろう(Study2)
・世界観への脅威(Study3)，自尊心への脅威(Study4)に対して，愛着不安が強い個人は恋愛関係での親密さの欲求の表出を強め，愛着回避が強い個人はその表出を弱めるであろう．

Study1

◇目的：愛着への脅威が文化的世界観の防衛を惹起させるか否かの確認
・今まで論じたことに基づけば，安心システムのある要素への脅威はシステム全体の統合性(integrity)を損なうため，他の要素での補償的反応が生じる．
➢Greenberg et al.(1994)：愛する人の死について考える条件でも，文化的世界観の防衛が生じる．但し，自己の死について考える条件よりもその程度は弱い．
➢Mikulincer et al.(2002)：親密な関係における問題について考えると，死の思考の接近可能性が高まる．
＊Greenberg の研究では，死に関する問題と対象喪失が交絡→本研究では，死ではなく関係の崩壊による対象喪失を扱う．
・但し，別離を考えることの効果が死の思考の効果とどの程度類似しているのか検討するため，死について考える条件（MS 処理条件）も設けている．
・従属変数：親アメリカ的・反アメリカ的エッセイの内容と著者の評定[4]
文化的世界観の防衛は自我と文化の同一化，またより大きな社会的存在による保護という,同化の要素を含む
→高愛着不安では防衛が強まるが，高愛着回避では防衛が高愛着不安者ほどには高まらないであろう．

◇方法：
参加者：大学生 131 名(女性 103 名，男性 28 名).
自分とアメリカはどれくらい結びついている(identified)か？という 5 件法の質問紙に対して，3 以上(3：少し，4：かなり，5：非常に)と回答した 127 名が分析対象.
手続き：2 つの別々の実験に参加してもらう，という教示を行った．1 つめは「性格と態度に関する研究」というカバーストーリー.
➢1 つ目
・アメリカとの結びつきに関する質問
・Experiences in Close Relationship Scale(ECR,;Brennan et al.,1998)：36 項目 7 件法の愛着不安・愛着回避を測定する質問紙.
・フィラー項目：Rosenberg(1965)の自尊心尺度，EPI(Eysenck & Eysenck, 1967)の神経質傾向下位尺度
・実験操作：死，別離，TV(統制条件)の各条件に無作為配置．被験者は配置されたトピックに

[4] TMT に基づく研究で頻繁に用いられる文化的世界観防衛の測度

ついて 2 つの自由記述の質問に回答（そのことについて考えるとどんな思考や気持ちが浮かぶか；実際に起こるとそれはどのような感じで，起こった後にはどういう思いが浮かぶか）
・PANAS による感情測定
➢2 つ目の研究：エッセイに対する直観レベルの反応に関する予備研究というカバーストーリー
・外国人学生が書いたということになっている親アメリカ的エッセイと反アメリカ的エッセイを読み，それぞれの筆者を評定した．
項目：筆者のことがどれくらい好きか，筆者はどれくらい知性的か，筆者はどれくらい知識が豊富か，筆者の視点に同意するか，エッセイについてどう思うか(得点が高いほど好意的評価)
・デブリーフィング，実験目的に気づいていなかったかの確認．実験目的について気づいていた参加者はいなかった．

◇結果
・MS，分離，不安得点，回避得点を予測変数とする重回帰分析．不安，回避の得点はセンタリング．第 1 ステップで主効果，第 2 ステップで 1 次の交互作用，第 3 ステップで 2 次の交互作用を投入．
➢反アメリカ的エッセイに関しては，全ての項の効果なし
➢親アメリカ的エッセイ
・モデルは全てのステップで有意(p=.001)．分散説明率はステップ 1 で 16%，ステップ 2 と 3 では 30%
・愛着不安(β=-.34)，MS(β=.25)の主効果が有意
・これら主効果は，MS×愛着不安(β=.36)，別離×不安(β=.27)により制限をうけていた．
→高愛着不安者では，MS 条件，別離条件で TV 条件よりも筆者の評価が高かったが，低愛着不安者ではそのような傾向が見られなかった．
・MS×愛着回避(β=-.33)も有意．低愛着回避者は MS 条件で筆者の評定が高かった．別離においても似た傾向は見られたが，有意ではなかった．
➢感情
・否定感情については，不安(β= .32)の主効果が有意，回避の効果(β=.15)が有意傾向
・肯定感情については，不安(β= .-27)，回避の主効果(β=-.17)とも有意．また，MS(β=.28)と分離(β=.36)の主効果も有意．
・否定感情，肯定感情を共変量として投入しても，著者評定の結果は変わらず．

◇考察
・愛着不安の高い者は，別離について考える条件で親アメリカ的エッセイの筆者をより肯定的に評価していた．：予測をほぼ支持
→高愛着不安者において，愛着関係への脅威が世界観の防衛を生ぜしめることを示唆
・統制条件では，愛着不安と親アメリカ的筆者の評価が負の関係
←愛着不安≒低自尊心者と考えれば，解釈可能
➢Harmon-Jones et al.(1997)：（死について考えない条件で）高自尊心者は低自尊心者よ

りも内集団バイアスを強く示す

➢Bylsma et al.(1997)：不安と低自尊心の関連を指摘

…愛着不安の高い者は，普段は自己が同一視しているもの（ここではアメリカ）を低く評価しているが，脅威にさらされると，低不安者が安定して示すような世界観の防衛を示すのかもしれない.

・愛着回避の強い者は，脅威により親アメリカ的筆者の評価が高くならなかった

→集合的な実体に対する同化による安心の確保に動機づけられていないため？

・別離条件，MS 処理条件で，TV 条件よりも肯定感情の得点が高かった

→近接的防衛として情動制御のプロセスが働いた？

＊但し，本研究の以降の研究では同様の効果はみられていないし，先行研究でもほとんど報告されていない[5].

・研究 1 では，愛着不安の高い者が同化による安心獲得を行うことが示唆された．研究 2 では，この反応を示さなかった愛着回避の高い者において，別離の思考が自己価値の誇張による防衛を生ぜしめるかを検討する.

Study2

◇目的

・別離に関する思考が，自尊心獲得反応を動機付けるか否かを検討

・独立的特性[6]8 項目と相互協調的特性 8 項目[7](Sedikides et al.,2003)で自己評価を測定

→これらは愛着回避と愛着不安それぞれと異なった関係を持つと考えられるため

→これら項目は，事前にその重要度を評価されている.

・愛着回避の強い者は自己奉仕的な自己評価の歪みを示す傾向にある(Mikulincer, 1998)

→愛着回避の強い者は，脅威にさらされるとより強い自己高揚を示すであろう.

◇手続き

被験者：大学生 139 名(女性 43 名，男性 96 名)

質問紙：構成は以下の点を除いて Study1 とほぼ同じ．大教室での集団実施.

・最初に特性項目について重要度を 9 段階で評定

・PANAS の後に distraction として life habits questionnaire を実施(一日どれくらいテレビを見るか，どれくらい外食するか)を実施

・従属変数が，各特性項目が自分にどれだけあてはまるかの評価に変更(9 件法)

◇結果(MS，別離，愛着回避，愛着不安，独立・協調特性ごとの重要度評価)

➢独立的特性

・不安が強いほど，独立性を低く評価(β =-.24)

・独立性を重視するほど自己の独立性を高く評価(β =.47)

・MS×重要度(β =.23)，別離×重要度(β =.27)の交互作用が有意

[5] 実は自分がやった実験で出たケースが少しあります.

[6] ex. independent, leader, self-reliant

[7] ex. agreeable, cooperative, patient

MS，別離条件において，重要度を高く評価しているほど，自己の評価も高かった．

・別離×重要度×愛着回避の交互作用(β=.20)が有意
別離×重要度の交互作用は，主に愛着回避の強い者で見られた．

➢相互協調的特性

・協調性を重視するほど，自己を協調的だと評価(β=.50)

・MS×重要度，別離×重要度の交互作用が有意
MS，別離条件それぞれで，重要度を高く評価するほど自己評価も高い(β=.17，.19)．

・別離×重要度×愛着回避の交互作用は有意ではなかった．

➢感情

・ポジティブ感情では効果なし

・ネガティブ感情では，愛着不安の主効果(β=.27)，愛着回避の主効果(β=.12)，有意傾向の別離×愛着不安の交互作用(β=.17)；別離条件で愛着不安がネガティブ感情と関連

・しかし，感情を共変量として投入しても特性評価に関する結果は同じ．

◇考察

・MS により自己高揚が起こるという，先行研究と一貫する知見が得られた．また，別離でも同様の効果が得られた．

・協調的特性では MS，別離条件で自己高揚が生じた．一方，独立的特性では MS は主効果を持ったが，別離の効果は愛着回避によって調節されていた．

←Mikulincer et al.(2002)：separation という語を閾下呈示した後，愛着対象の名前を用いたストループ課題で，愛着回避の高い者は強い干渉を示す．しかし，failure を閾下呈示しても，干渉は起こらなかった．･･･separation という文脈での独立性は，愛着回避の高低による違いを引き出すような何かがある？

・総じて，愛着に対する脅威(別離の思考)は，MS 処理が引き出すのと同じ自尊心防衛反応を生ぜしめること，またこの効果が一部愛着回避傾向によって調節されることが示された．Study1 の文化的世界観の防衛反応に関する知見とあわせ，愛着脅威が死の脅威と同様の防衛を生ぜしめることが示された．

・Study3，4 では，自尊心と文化的世界観が愛着関連反応を生ぜしめるか否かを検討する．

Study3

◇目的

・世界観への脅威が恋愛関係における親密さへの欲求に与える影響の検討

➢Steele(1988)：自己の価値観を肯定すると，防衛性が低下する
→世界観への脅威が防衛性を高めることを示唆

➢Mikulincer et al.(2000, 2002)：death，illness，failure，separation という語は，愛着システムを自動的に活性化させる．閾下呈示でも同様．

・愛着理論の想定に基づけば，高愛着不安者と高愛着回避者では，親密さへの欲求の基底値が異なると考えられる．低回避者は高回避者よりも親密さへの欲求が強いと考えられる．

→安定型と没頭型では，世界観脅威条件で親密さへの欲求が高まるであろう
→撤退型は，世界観脅威条件で親密さへの欲求が低まるであろう
→恐れ型に関しては確たる予測なし(接近と回避どちらが行動として現れるか不明なため)

◇方法
被験者：大学生 120 名(女性 100 名，男性 19 名，不明 1 名)
材料と手続き：以下の点を除いて実験 1，2 と同じ.
・MS，別離の操作を世界観脅威への操作に置き換え
脅威条件：アメリカに対する 2 つの否定的なエッセイを読む
統制条件：アメリカに対する 2 つの中性的なエッセイを読む
・脅威操作のあと，エッセイの評価を求める
・続いて，従属変数として恋愛関係での親密さを測定
理想的な恋愛関係につて想像(現在，過去のものではなくて)
5 項目(どれぐらいその関係は親密であってほしいか，どれくらい相手と心理的に親密でありたいか，相手とどれくらい時間をすごしたいか，相手とどのくらい思考や感情を共有したいか，どのくらい相手から共感や支援に頼りたいか)を 8 件法で評定

◇結果：世界観脅威，愛着不安，愛着回避を予測変数とする重回帰分析
・愛着不安が高いほど，関係の親密さへの欲求が高い(β =.24)
・愛着回避が高いほど，関係の親密さへの欲求が低い(β =-.58)
・2 次の交互作用が有意(β =.29)
没頭型，安定型は条件間の差なし，撤退型では脅威条件で親密さへの欲求が低く，恐れ型では脅威条件で親密さへの欲求が高かった.
←安定型・没頭型の差がなかったのは天井効果によるものだと考えられる.

◇考察
・愛着不安は親密さへの欲求と正の，愛着回避は負の関係を持っていた
→従属変数の妥当性を示すもの
・愛着回避が強いものは条件によらず親密さへの欲求が高かったが，愛着回避が強く愛着不安が弱い者(恐れ型)では世界観脅威条件で親密さへの欲求が低かった.
・愛着回避も愛着不安も強い者(恐れ型)では，世界観脅威条件で親密さへの欲求が高かった.
→脅威条件下では，過活性傾向が活性不全傾向を上回る？
・撤退型と恐れ型のパターンの違いは予測していなかったもの
→研究 4 では，違う種類の脅威を用いてこのパターンの違いが再現されるか検討する.

Study4
◇目的
・Study3 の結果が，自尊心への脅威によっても再現されるかの検討
→提唱したモデルに基づけば，自尊心脅威も他の脅威と同様に防衛反応を生ぜしめるはず.
→ゆえに，安定型，没頭型では脅威条件で親密さへの欲求が高くなるか脅威なし条件と同じで

あり，撤退型では脅威条件で親密さへの欲求が低くなるはず．また，恐れ型については，脅威条件で親密さへの欲求が高くなると考えられる．なぜなら恐れ型が抱える愛着への不安は，対象の回避より対象との接近により緩和されると考えられるからである．

◇手続き

被験者：大学生 179 名(女性 116 名，男性 63 名)

手続きと材料：20 人ぐらいのグループで実施

・ECR とフィラー質問紙→全ての被験者が終わるまで待って次に進む

・2 分間のワードサーチパズル(自尊心脅威の操作)

統制条件：娯楽のための(for enjoyment)という教示で，簡単なものに取り組ませる

自尊心脅威条件：「この大学のほとんどの学生が 2 分間で 4 つの単語を見つけることができ，和が多ければ多いほど優秀」という教示で実施するが，実際は単語を見つけることが不可能なものに取り組ませる(ターゲット語が文字列の中に含まれていない)

＊さらに，同じ教室に統制条件と自尊心脅威条件双方の参加者がおり，脅威条件の参加者は自分が出来ていないと思い込むよう仕組まれている．

・Study3 と同じ方法で親密さへの欲求を測定．しかし，天井効果を防ぐため，21 件法に変更．

◇結果

・愛着不安が強いほど親密さへの欲求は高く(β =.23)，愛着回避が強いほど親密さへの欲求は低い(β =-.55)

・2 次の交互作用が有意(β =.28)

安定型，没頭型の者は条件にかかわらず親密さへの欲求が高い．一方で，恐れ方は脅威条件で親密さへの欲求が高く，撤退型は脅威条件で親密さへの欲求が低かった．

◇考察

・21 件法への変更によっても，天井効果は消去できなかった．

・操作チェックを行わなかったため．本当に困難なパズルにより自尊心が脅威にさらされたのかは定かではない．

・先行研究で，同様の方法が自尊心を下げるための操作として用いられている

・Study4 の自尊心脅威による結果は，Study3 の文化的世界観への脅威による結果と本質的に同じということを考えれば，困難なパズルにより自尊心の脅威生じていたと思われる．

・Study3,4 を通して，世界観脅威と自尊心脅威は愛着回避的の強い物で，愛着関連の防衛反応を生ぜしめた．

→愛着システムは世界観防衛，自尊心防衛とよく似た形で反応することが示された．

・将来の研究では，個人差による調節効果の更なる検討が必要．また，天井効果が生じないような，愛着システムの効果を測定するほかの方法が必要．

General Discussion

◇本論文では愛着理論と TMT を統合し，防衛の三元モデルを提案した．そして，その検討を行

った.

・愛着への脅威が世界観と自尊心の防衛を動機付ける(Study1, 2)

・世界観，自尊心それぞれに脅威を与えると，愛着関連の防衛反応が生じる(Study3,4)

→既存の研究知見と合わせて，三元モデルからの予測を支持するもの

→これらの結果が自己報告による感情に媒介されていなかったこと，また参加者がその影響に気づいていなかったことから，これらの反応は自動的に生じると考えられる.

◇上記の反応は愛着スタイルの個人差によって調節されていた

・愛着脅威による世界観防衛は愛着不安が高いか愛着回避が低い個人で生じる(Study1)

・愛着脅威による独立的特性での自己高揚は，愛着回避が強いものだけで生じる．一方で協調的特性ではスタイルによる調節効果なし(Study2)

・世界観の脅威，自尊心の脅威がある場合に，撤退型では親密さへの欲求が低下し，恐怖方では欲求が高まる(Study3, 4).

→三元モデルのいずれの要素を考える時も，愛着スタイルの個人差を考えることが必要

◇残された，興味深い疑問

・ある防衛要素を支持することで，他の要素による防衛の必要性が下がるか？

➢Mikulincer & Shaver (2001)

愛着での安心を高めると，世界観防衛が低下する

←しかし，これにより自己高揚も低下するかは不明

➢Harmon-Jones et al.,(1997)

自尊心を高めると，MS 処理後の防衛反応が弱い

➢Cohen et al.(2000)

自己肯定が信念に反する情報に対する開放性を高める

←自尊心を高める操作が愛着での安心も高めるのか，単に他の世界観への開放性を高めるのかは不明

←また，世界観や信念の肯定が全体的な防衛性を低めるのは分かっているが，それらが特に自尊心の防衛や愛着の防衛を低減するかは不明.

・防衛の効果を媒介する潜在的過程の検討

TMT に基づく研究でも本論文で報告した研究でも，意識的な感情の媒介の証拠は得られていない．しかし，潜在的な媒介過程の存在を示唆する研究が存在.

➢Koole et al(1999, Study5)

潜在的な肯定的感情が，自己肯定による脅威後の考え込み(rumination)の低減を媒介することを報告.

➢Greenberg et al.,(2003)

不安を低減する，という教示でプラセボを与えると，MS 処理の世界観防衛に対する効果が消失することを報告.

→三元モデルは不安に対する防衛を扱うものなので，潜在的な不安は媒介変数のよい候補

◇本研究のモデルは愛着，自尊心，世界観が代替可能な防衛メカニズムであることを含意してい

る.

・類似の立場：Tesser et al(1996) 自尊心防衛の多くのメカニズムは機能的に相同

・本モデルはより一般的で包括的

・・・自尊心維持の複数のメカニズムを安全の維持のための，一見全く異なった要素を包含する安全維持システムの一部として捉えている

・防衛の代替可能性からは，1 つの要素での防衛が他の要素での防衛が不要にすることが示唆される

←さらなる検討が必要な部分

◇防衛の要素の好みの個人差は存在するのか，また，どのような状況でそうであるのか？

←本研究での，愛着スタイルによる差

→世界観に対して脅威を与えるような愛着対象に対しても，愛着関連の防衛反応が起こるのか？

◇安心システムの構成に関する問題

・愛着を既に TMT によって提案されている自尊心と文化的世界観に付け加える必要があるのか？

・・・愛着での安心は，世界観を与える愛着対象の基準を満たすことによって得られる自尊心なのでは？

←Rosenberg の尺度得点の影響を除いても，愛着過程にかかわる結果は変わらないことが複数の研究で報告されている・・・愛着と自尊心は少なくとも一部分は異なるもの

←本研究では，愛着回避の強い者は，脅威に対して自己高揚を示したが，愛着対象からは距離を置こうとした・・・愛着と自尊心は同一ではない.

←愛着関係が自尊心に脅威を与える条件でも，MS 処理が親密さへの欲求を高める(Hirschberger et al.,2003)・・・愛着と自尊心が別であるだけでなく，愛着による防衛は，他の防衛を犠牲にする価値のある大きい効果を持つのかもしれない.

◇他に，愛着理論や TMT で検討されていないメカニズムが，心の平安の維持にかかわっているかもしれない

・不確実性低減(但し文化的世界観等に効果が見られないことも多い)，食事，買い物，性的活動，娯楽など・・・

◇さらなる防衛方略が証明されるか否かにかかわらず，それらを 1 つの安全維持のモデルに統合することは有意味であると我々は考える．防衛や個人差にかかわるミニセオリーを乱立させるよりも，主要な安全維持のメカニズムの力動的な相互関係を明らかにする 1 つのモデルの想像を企図してみてはどうだろうか？